

開催地名：長野県須坂市	
開催日時	令和2年1月18日（土） 14：30 ～ 16：00
開催場所	須坂市消防本部
語り部	大内 幸子 （宮城県仙台市）
参加者	自治会の自主防災組織ほか市民 約70名
開催経緯	須坂市では、昭和56年8月23日の台風15号により土石流が発生し、10名の尊い人命が奪われ、甚大な被害を受けた。以降、大きな災害が無く37年が経過し、災害経験者が高齢化により減少しており、災害の継承が課題となっている。また、毎年「須坂市総合防災訓練」及び「防災講演会」を実施するも、近年は参加者が減っており、防災意識の向上が課題となっている。
内容	（１）はじめに 仙台市福住町は、50年ほど前に開発された新興住宅地である。毎年夏祭りを実施し、住民の横のつながりが構築されている。平成15年から自主防災組織を立ち上げ、重要支援者の名簿作成や他市町村との災害時相互協力協定の締結などを進めてきたことから、防災意識の高い町として全国に知られている。震災当日も、支援者リストにある約50人全員の安否確認は約1時間で完了した。備蓄食料が底をつく4日目には、2010年に町内会レベルで「災害時相互協力協定」を結んだ山形県尾花沢市・鶴子地区の人たちが、トラックに食料を積んで駆けつけてくれた。こうした町内会の取り組みは、「福住町方式」と呼ばれ、地域の防災モデルとして一躍注目されたが、課題や気付いた点も多い。 まず、重要支援者の名簿やマニュアルは取り出せなかった。家屋が崩壊し、立ち入れなかったからである。名簿が頭に入っていたので安否確認ができた。また、指定避難所は人が殺到して立ち上げが遅れた。避難所の高砂小学校には500名分の準備しかなかったが、そこへ1,500～1,600名が来た。市役所には、帰宅困難者である2,000名以上の避難者が殺到した。 （２）避難所について ライフラインは止まり、電話・メールなどの通信も途絶えた。災害時に水が出る公園を知っていたので水汲みに行き、炊き出しを行った。最も困ったのはトイレである。小学校のプールに水汲みに行き、トイレを流した。公園に手掘りのトイレも作った。震災の関連死にはトイレに関したものが多い。外のトイレは寒いし、中のトイレは機能していないので我慢して水分を摂らない人がいる。そうすると体調を崩す。トイレ対策は事前に考慮しておくべきである。 避難所に殺到する8割はいわゆる災害弱者と言われる人たちである。高齢者、障害のある方や女性、子どもである。女性は子育てをされていて地域の人たちのことをよく把握している。女性が男性と一緒にリーダーとなって動いたほうが避

難所はうまくいく。また大災害では公助は期待できない。通信手段がストップしているし、道路も寸断されている。その上行政自体もパニックで、立て直すのに時間がかかる。地域での自主防災の事前準備が必要なのである。普段から準備や訓練をしていないところは、非常時になってもできない。これが私たちの東日本大震災の教訓である。

福住町では毎年防災訓練をしているが、減災に力を入れている。大きな公園に20あまりのブースを設け、さまざまな催しをしている。中には水道、ガスなどライフライン担当者から話を聞くブースもあり、発災からどうやって対処したら良いかを教えてもらう。訓練には小学生や中学生にも参加してもらっている。防災教育は子どもの頃からでないといけないし、子供が参加することで親や祖父母の参加にもつながる。

(3) まとめ

被害を少なくするのも復興も、主体は自分であることを認識していただきたい。災害が大きければ大きいほど公助は来ない。自分のことは自分でやり、隣近所、町内で助け合うしかない。

また、どんなに文明が発達しても 私たちは自然災害の前では無力である。今回これをいやというほど知った。知識や備えがないと災害に勝つことはできないのである。



開催地より

非常に熱心に地域の防災活動に取り組まれており、本市の地域住民にとって、大変参考となる内容であった。今後の防災活動の一助としていきたい。